総合教育センターだより

Kyoto Prefectural Education Center

153

令和5年10月31日（火）
第153号(通算236号)
京都府総合教育センター
TEL：075-612-3266

令和5年度 学校DX研修　授業と校務でのＩＣＴ活用力向上を目指して

学校 DX（ディーエックス） 研修とは

京都府の教職員のＩＣＴ活用指導力の向上を図り、効果的なＩＣＴの活用を一層推進するため、本年度から京都府デジタル学習支援センター（ＤＬＣ）との協働により実施している研修講座です。
ＤＸはデジタルトランスフォーメーションの略です。

オンデマンド動画として約50分で学べます！
※ 一部配信のない講座あり

実施済の講座は、見逃し配信をしていますので、右の二次元コードから御視聴ください。
※ 動画視聴後のレポート提出等は不要です。
※ パスワードは「令和５年４月３日付５教セ第73号」でお知らせしているものです。

「どんな研修やってたの？」という声にお応えして実施講座を御紹介します！

授業でのICT活用指導力向上研修

No.831・877
【中級・上級】授業活用（iPadでスライド作成）
講師　Yohaku Education 代表　品田　健
SOZO.Perspective 代表理事　海老沢　穣

講座のねらい　プレゼンテーションアプリ「Keynote」を用いて、分かりやすく、見やすいスライドを作成するポイントを理解する。

内容　Keep It Super Simpleを合言葉にスライドショーの資料における画像やテキストの使い方について下の5つの原則に沿って例示を見ながら学びました。

1. １つの画面に画像は１枚
2. テキストは１行で10文字まで
3. テキストの色に意味をもたせる
4. フォントの種類を使い分ける
5. フォントのサイズを使い分ける

教材作成以外にも授業や行事など生徒が発表する場面で活用できる内容でした。

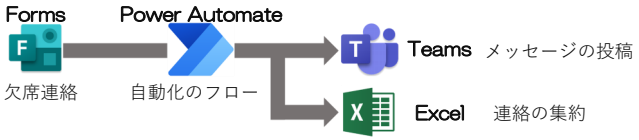
受講者の感想
プレゼン発表などで生徒が資料を作成する際の指導や、自分自身が資料を作成する際に今回学んだことを実践したいです。

校務でのICT活用力向上研修

No.829・875
【中級・上級】校務活用（Power Automate①）
講師　株式会社内田洋行　嶋田　幸子

講座のねらい　Microsoft Power Automateを活用した欠席連絡の自動化について理解する。

内容　Power Automateを活用した校務のデジタル化について日常業務を効率化するための使い方のヒントを学びました。



子どもの学校生活や学習内容の蓄積など校務だけではなく学習指導等の場面でも活用できる内容でした。

受講者の感想
カラクリや仕組みが不明のままで運用していましたが、この研修で仕組みが理解できました。より適切に運用できるようにしていきたいです。

講座の詳細は右上の二次元コードから御確認ください！

No.754　学校事務職員パワーアップ講座Ⅱ　10月6日(金)実施　講師　文部科学省総合教育政策局政策課　企画官　廣田　貢

地域とともにある学校づくりを目指して　－他人事から「ジブンゴト」へ－

本講座は、「子供たちの生きる未来」や「地域とともにある学校づくりと学校事務職員」というテーマで講義・ワークショップを行いました。

受講者は、学校と地域の目指すべき連携・協働の姿や「チーム学校」の重要性を学びました。
また、日頃の業務を振り返り、学校事務職員の強みや魅力を再発見し、学校での生かし方を考えました。

受講者が考える学校事務職員の強み・魅力

■学校中の色々な情報が入ってくる。
■地域や行政機関等の外部と学校内部の橋渡し役になれる。
等

ワークショップと受講者の声

自分が「こうあってほしい」と思う学校の姿とその実現に向けて事務職員として取り組めることを共有しました。

■ビジョンを考える
子供も大人も１人ひとりの個性を大切にする学校にしたい。

■今を見つめる
ネガティブなところばかりが気になるが、よさや強みにもっと着目する。

■ビジョンを叶えるアクションを考える
事務室の中だけでなく、外に出て教職員等と話す機会を増やす。

「チーム学校」として組織的に取り組むために大切なこと

廣田先生の御経験をもとに「チーム学校」として新たな一歩を踏み出していくための考え方を学びました。

自分の**強みを発揮する**という発想
＋
弱みを補い合う、助け合うという発想

一人じゃ何もできないから
仲間とチームで解決していく

複雑かつ困難な課題であればなおさら

本講座は講師の先生の御厚意により、見逃し配信をしています。皆様に共有したい内容ですので是非御視聴ください。

オンデマンド動画はこちらから

※ パスワードは「令和５年４月３日付５教セ第73号」でお知らせしているものです。

No.459：京都教育大学サテライト「明日から役立つ！発達障害のある児童生徒の理解と支援」講座を実施

児童生徒への声かけ、生涯を通じての医療や家庭との連携を意識した支援

講義題
「応用行動分析を活かしたアセスメントと声かけ」
講師：京都教育大学　佐藤　美幸　准教授

応用行動分析を研究されている佐藤准教授から、「先行事象（どんな時に）」「行動（何をすると）」「結果（どうなるのか）」の関係性や情報の整理等、行動のアセスメントに必要となる基礎知識を学びました。

さらに、「強化（メリットで行動が増える）」「消去（メリットがなくなると行動が減る）」「弱化（嫌なことがあると行動が減る）」という行動の傾向を踏まえ、実際のアセスメントの手順をTCIT（Teacher-Child Interaction Training）のPRIDEスキルなどの演習を通して考えました。

- Praise（具体的にほめる）
- Reflect（子どもが言っていることを繰り返す）
- Imitate（子どもの行動をまねる）
- Description（子どもの動きを実況する）
- Enjoy（一緒に楽しむ）

受講者の感想

これまでは**漠然と**、ほめることは子どもの成長にとって良いことであると考えて**実践してきました**が、**データに裏付けされた理論を基にお話をしていただいたことで、自分が褒める声かけをすることに自信が持てる**研修となりました。演習も楽しく、明日から使える内容で有意義でした。

講義題
「医療と連携した生涯に渡る一貫した支援」
講師：京都教育大学　小谷　裕実　教授

小児科医でもある小谷教授からは、医療と教育の共通目標である子どもの「社会的自立」を支援するための医療職のアプローチ、教育との連携の必要性について学びました。

また、幼児期・学齢期までは周囲の理解、青年・成人以降は自己理解を支援することが大切であり、子どもが多くの時間を過ごす学校には、その環境を調整することが求められます。教育や医療、家庭（保護者）等が連携し、子どもへの切れ目のない支援を行うことが、子どもの「社会的自立」に向けたライフスキルを培う基盤となることを教えていただきました。

受講者の感想

実際の医療現場での診断などを聞くことができて、良い機会になりました。**学校も共同治療者である**、ということを強く意識することが大切だと思いました。

特別支援教育に関する学びをさらに進めたい方は次のサイトに利用申請することで、様々な動画を視聴できます！

◀ NISE学びラボ

国立大学法人京都教育大学 ▶
「先生を究めるWeb講義」

No.413：幼小特支「図画工作科の授業づくり」講座～造形遊びの指導とＩＣＴ活用～

「造形遊び」と「絵や工作、立体」の違いについて、説明できますか？

本講座は、鳴門教育大学　山田芳明教授の上記の問いから始まりました。

問いを考えるにあたり、まずは小学校学習指導要領解説（図画工作編）をもとに、図画工作科の表現領域を担う「造形遊びをする活動」と「絵や工作、立体に表す活動」との共通部分や違いについて整理をしました。そして、造形遊びを通して、子どもたちが経験する「つくり、つくりかえ、つくる」という学びの過程を、どのように評価するかについて、造形遊びを受講者が体験し、お互いの姿をヒントに考えました。

「造形遊び」

- **遊びがもつ教育的な意義と能動的で創造的な性格に着目し、その特性を生かした造形活動**
- **材料や場所、空間などと出会い、それらに関わるなどして、自分で目的を見付けて発展させていく。**

試しながら、表したいことを見付ける！

「絵や工作、立体」

- **用途や目的があるものをつくったりするなどの造形活動**
- **感じたこと、想像したこと、見たことなどから、児童が表したいことを表す活動**
- **自分の「思い」や「願い」を作品に表す。**

どのように表すかを考える！

校内研修でやってみよう！

造形遊びの評価について、**体験をもとにみんなで**考えてみませんか？

①体験する

- 教科書から造形遊びを１つ選ぶ。
- 小学生になったつもりで思う存分活動に取り組む。

②見付けて、記録する

- 評価の観点を決める。
- 評価規準を満たしている様子を見付けてタブレット端末で撮影して残す。

③場面と理由を共有

- 撮影した写真を見せ合う。
- 撮影した理由を発表する。

④検討

- 指導と評価について検討する。

受講者の感想

演習を通して、**造形遊びをする姿をタブレットに記録したり、指導の意図や思いを対話を通して把握したりする演習**が、大変参考になった。指導者が適切に評価し授業改善をしていくためにも日々の実践に生かしていきたい。

考えを共有することで、指導者（学校）が評価規準をもてるようになります。

この秋、落ち葉を使った造形遊びにチャレンジしてみませんか。